

読書指導の試み —現代教育学部における実践—

高 木 徹

1 読書習慣のない学生の存在

『読書と豊かな人間性』¹⁾第Ⅱ章に掲載されたデータによると、2005年の「5月1か月間の1人あたりの平均読書冊数」は、小学生が7.7冊であるのに対し、中学生は2.9冊、高校生は1.6冊となっている。小学生の読む本は簡単に読み通せるものが多い、ということはあるが、中学生・高校生の読書量が少ないという事実に変わりはない。

また2005年の「5月1か月間中に1冊も読書しなかったと回答した者(不読者)」の割合は、小学生がわずか5.9%であるのに対し、中学生は24.6%、高校生は50.7%と、高校生の半分は1か月間に1冊も本を読まない、というデータを示している。

最初のデータとあわせて考えるなら、高校生の半分は1か月間に平均3冊程度の本を読み、残りの半分は1冊も読まない、ということになるのではないか。読書習慣を失って久しい高校生がかなりの割合で存在し、その一部は本学にも入学しているのではないかと推測される。

2009年4月、入学直後の児童教育学科1年生62名を対象に、過去1年分の読書量を調査した。質問は「あなたはこの1年間(2008.4~2009.3)に何冊の本を読みましたか。授業等で強制された本は除き、自主的に読んだ本の冊数を教えてください。また、雑誌や漫画、ケータイ小説なども除外してください。」というものである。

その結果は以下のとおりである。

0冊	29%
1冊	15%
2冊	8%
3冊	10%
4、5冊	12%
6、7冊	5%
8、9冊	0%
10冊以上	21%

本をよく読む層と、わずかしか(あるいはほとんど)読まない層とに二極化していることがわかる。入学者の3割から5割程度は、読書習慣のない学生と言って

よいだろう。

2 読書習慣を身につけさせるには

読書習慣のない学生に、読書習慣を身につけさせるのは至難の業である。それにはすべての教員が、あらゆる機会をみつけて、以下のことを行うべきだろう。

1. (強制的にでも)授業に関連して本を読ませる。
2. 多種多様な本を紹介する。

1は、それぞれの授業で教科書以外の本を読ませる課題を積極的に与える、ということである。その負担に学生が不満を抱かないように「1単位の授業科目」は「45時間の学修を必要とする」²⁾ことを、あらかじめ理解させておくべきだろう。

2については、どれほどすぐれた本であっても、すべての学生に合うとは限らない。それゆえ、様々なレベルの、多様な興味関心に応える本を紹介していくことが必要とされる。課題を与える際にも、1冊の本に限定するのではなく、選択の余地がある方が望ましい。また、学生が自主的に本を読みたいと思ったときに、すぐ手に取れる適切なブックリストがあるとよい。

従来、この1・2は本学の「総合科目」(1年春学期)の中でも行われてきた。新入生のほとんどが受講するこの科目では、教科書『総合科目への招待』の中で本学教員の推薦図書が短い紹介文とともに掲載されている。2009年版では、107冊の本が挙げられ、学生はその中から2冊を選び、読書レポートを提出することになっている。

ただ、半期に2冊ではとても十分とは言えない。筆者はいつも「4年間で100冊(一月に2冊)」という目標を学生に掲げているが、やはりそれぞれの教員が、学生に本を読ませるべく仕向ける必要がある。それについて、筆者のささやかな試みを次に述べたい。

3 学部HPにおける読書案内

現代教育学部オリジナルホームページに「読書のひろば」³⁾という読書案内のページを設けた。ページの構成は、トップページが「今月の1冊」で、学生と教員の推薦図書を、それぞれ1冊ずつ掲載している。教

員の推薦図書のページは他大学でもよくあるが、学生が親近感を持ってくれることを狙って、学生の推薦図書載せるようにしている。なお、後述するが、学生の推薦文は授業中に課題として書かせている。

トップページから先に進むと、「新入生に勧める12冊の本」と「現代教育学部教員のこの1冊」というページがある。

「新入生に勧める12冊の本」では、現代教育学部の新入生を意識した12冊の本を推薦している。これは、入学前教育で「この12冊の本の中から何冊かを選び、レポートを提出しなさい」という形で活用している。

また「現代教育学部教員のこの1冊」は、各教員推薦の1冊を挙げてもらい、それを月替わりで、トップページの「今月の1冊」に掲載している。

こうした読書案内のページは、存在するだけではあまり効果を上げられないのではないか。入学前教育など、学生に何か課題を与えるときに利用する形で活用していくのが望ましい。

4 授業と関連させて本を読ませるために

筆者は、児童教育学科の1年春学期に開講される「読書と豊かな人生」という科目を担当している。この科目は、司書教諭資格⁴⁾に関連する科目である。

司書教諭とは教員免許を前提とする資格であり、司書教諭は学校の中で図書館運営に携わり、読書指導の中心となるべく期待されている。つまり、学校図書館運営・読書指導の専門家養成する科目であるが、受講している学生は必ずしも本好きな学生とは限らない。そこで授業内容とも関連させて、受講者にできるだけ多く本を読ませる指導を行っている。

一つは、受講者全員にブックトークを行わせている。ブックトークとは、「図書紹介法の一つで、一定のテーマのもとに数冊ないしは10冊ぐらいの図書をまとめて、実物を見せながら語り聞かせる方法」⁵⁾というものである。例えば筆者は、手本を示すために、「サッカーと言葉」というテーマで『オシムの言葉』⁶⁾『言語技術』が日本のサッカーを変える⁷⁾『論理的に考える力を引き出す』⁸⁾『悪魔のパス 天使のゴール』⁹⁾の4冊を紹介している。

これ自体、図書館司書や司書教諭にとって必須の技術であり、そうした技術を身につけさせるのが主目的であるが、それだけでなく、ブックトークをするためには数冊の本を読まなければならない、という副次的効果もある。

筆者の授業では、すべて著者の異なるものという条件をつけて、3冊から5冊程度の本を口頭で紹介させている。これが文書のレポートならば、コピー・アンド・ペーストが心配される場所であるが、同級生を

前にして発表するというので、自分の言葉で話さなければならない、という意識が働くようであり、よそから借りてきたと思われる言葉で語る学生はほとんど見られない。なお、このブックトークの発表は、20%の割合で評価に加えている。

もう一つ、授業中の課題として、同じ学部の学生を読み手に想定し、本を紹介する文章を書かせている。2009年度は、中部大学附属三浦記念図書館から、「岩波ジュニア新書」と「岩波少年文庫」¹⁰⁾それぞれ1冊ずつを選んで借り出させ、その本を参照しながら推薦文を書くという課題を授業中に課した。

図書館から本を借りるということで、必然的に全員が異なる本を持つことになり、他人の文章を写すこともできない。自分で読んで書かなければならない、という状況に学生を追い込むわけである。

こうして書かれた紹介文のうち優秀なものは、現代教育学部ホームページ「読書のひろば」に月替わりで掲載している。あらかじめ、優れたものはホームページに掲載すると予告することで、学生たちも真剣に課題に取り組むようである。なかには、後日、自分の文章が掲載されるかどうか、尋ねてくる学生もいる。学生にとって、自分の書いた文章が選ばれて掲載されるということは、大変名誉なことなのだろう。

「読書のひろば」に載った推薦文に刺激を受け、他の学生がその本を読むという効果は、あまり期待できないかもしれないが、少なくとも課題に真剣に取り組ませ、そしてホームページに掲載された学生を顕彰する効果は十分である。

同様の課題は、幼児教育学科1年秋学期開講の「児童文学」でも行っている。

5 まとめと他の授業への応用の可能性

音声（話す）と文字（書く）、両面から本を紹介させるという課題を与え、ホームページとも連動させる。そういうやり方で学生が本を読む機会を増やすように指導を行っている。

ただ、このようにして強制的に本を読ませることが、やがては自主的に読書をする習慣につながっていくかどうかは、今のところ未知数であり、その点については、来年以降に追跡調査をしたいと考えている。

ところで、Wikipediaを始めとするWeb上からのコピー・アンド・ペーストを駆使した学生のレポートに頭を悩ませている教員が多いだろう。

図書館司書や司書教諭などの資格とは全く無関係の授業でも、学生の読書を促すために、このブックトークの方法が使えるのではないか。授業内容に応じ、教員がいくつかのテーマを提示し、一つを学生に選ばせて発表させる、という形で活用できる。テーマに合っ

た本を自分で探すところから勉強が始まる。この方法であれば、一度に数冊の本を読ませることができるし、あるテーマにそって本を選ばせるので、一つのテーマについて様々な角度から考える契機にもなる。また筆者の経験からすれば、口頭発表の方が、きちんと読んで自分の言葉で話さなければならない、という意識が学生に働くようである。

さらに、人前で本の内容や魅力について語るという行為は、(パソコンを使用しない)ある種のプレゼテーションの訓練としても有効である。筆者の授業での学生の様子を見てみると、1年春学期ということもあり、数十人を前にして話すというだけで、相当緊張を強いられるようである。早い時期から、そういう場を多く踏ませることで、3年生・4年生になったときに、人前で堂々と自信を持って話せるようになる、そういう人材育成にも役立つと考えている。

一方、この方法の最大の欠点は、授業中に発表させるため、大人数の授業には向かないということである。一人3～5分、1回に5人として、70人くらいまでが限度であろう。

以上、筆者のささやかな試みの概略を述べてきたが、これが分野の異なる授業においても、何らかの参考になれば幸いである。

注

- 1) 『読書と豊かな人間性』(2006年、全国学校図書館協議会) 23頁
- 2) 中部大学『学生便覧 2009年度』

- 3) http://www.isc.chubu.ac.jp/education/student/?page_id=14
- 4) 「学校図書館法」第5条「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない。」に基づくものである。
- 5) 『読書と豊かな人間性』(2006年、全国学校図書館協議会) 103頁
- 6) 木村元彦『オシムの言葉—フィールドの向こうに人生が見える』(2005年、集英社) 日本サッカーの代表監督を務めたイビツァ・オシムに取材したルポ。
- 7) 田嶋幸三『「言語技術」が日本のサッカーを変える』(2007年、光文社新書) サッカーの「エリート」育成には「言語技術」が重要であると主張する、日本サッカー協会専務理事による書。
- 8) 三森ゆりか『論理的に考える力を引き出す』(2002年、一声社) 日本サッカー協会が運営するサッカーのエリート育成機関「JFAアカデミー福島」に招かれ、「言語技術」の授業をしたのが、この本の著者である三森ゆりか。
- 9) 村上龍『悪魔のパス 天使のゴール』(2002年、幻冬舎) イタリアのサッカー・リーグ、セリエAを舞台にした小説。
- 10) 中部大学附属三浦記念図書館には「岩波ジュニア新書」342冊、「岩波少年文庫」212冊の蔵書があり、64名の受講者(2009年度)が一斉に借り出しでも十分な冊数である。

(准教授 現代教育学部 児童教育学科)